

特殊学級から分校となった頃

小林次郎

(昭和 42 - 59 年度在職)

ふと振り返って見ますと、施設内の特殊学級・分校時代が懐かしく思い出されます。夏休みには肢体不自由児の起因疾患や病理学の知識学習の為に、山形大学に行き、指導を受けていました。その時栃木県の指導主事が、山形大学まで学習の様子を見に来ていたのには驚きました。

昭和 35 年 7 月 15 日付、県教育委員会から、市教育委員会宛、9 月 1 日より、肢体不自由児施設である、若草学園内に特殊学級設置認可、同年 11 月 1 日開設となり、入園児 5 名でした。それが、昭和 39 年 6 月 1 日からは通園も開設され、昭和 42 年 5 月には児童・生徒数が 79 名となっています。

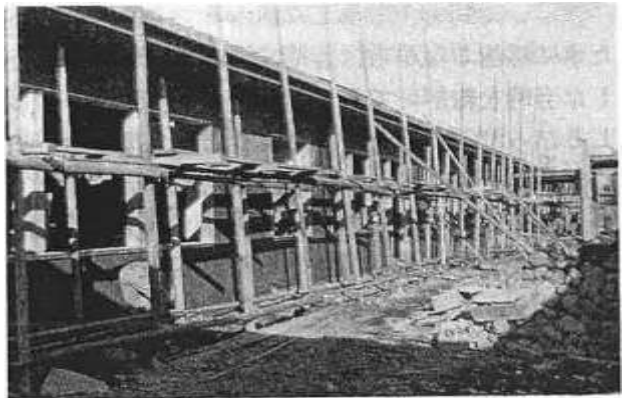
その年度の障害別は、脊髄性小児まひが 39 名、脳性まひが 16 名、股関節脱臼が 8 名で、ベッドサイドの学習指導を必要とする児童・生徒が多かったので、担任の先生が忙しく動いていました。



特殊学級の時、小学部の卒業生

野沢養護学校若草分校になる前の特殊学級の時、小学部の担任は全科目を担当するので、オルガンの予習が大変です。毎日父兄二人が交替で、児童介助の為に来てくれていたのです。下手なオルガンは弾けないのです。

分校になってから、教職員は増員になり、本校から音楽専科の先生が来てくれていました。また、内田事務職員が病気の為入院することになり、足銀の本店に職員の給料を受けとりに行くことになり、金種別の現金内訳や事務の仕事を初めてやり、面白くもあり、先生に渡すまでの責任もあり、なかなか神経を使うものだと思つづく思いました。



若草分校の新築日
当たりの良い教室

脳性麻痺児の少なかった特殊学級の時は、普通校に復帰する児童・生徒が多く、退院する者がいれば、園の職員も児童・生徒も玄関で見送っていました。学習指導は普通校についていける学力をつけてやらなければならなかったのです。

分校になってから、脳性麻痺児の人数が多くなってきて、車いすを使う児童・生徒が増えてきて、指導法も変わり、その上、正当な欲求を満たしてやる必要に迫られ、校舎新築の内部に就いて、特にトイレに関して良い方法はないかと考えた時、福島県の平分校を訪問したときの、写真が役に立ちました。今も、これからも、至れりつくせりの世話を受けていることでしょう。

やがて若草養護学校は、近代的校舎に変わるということですが、肢体不自由児に適した、そして、理想的な校舎が出来ることを祈っています。